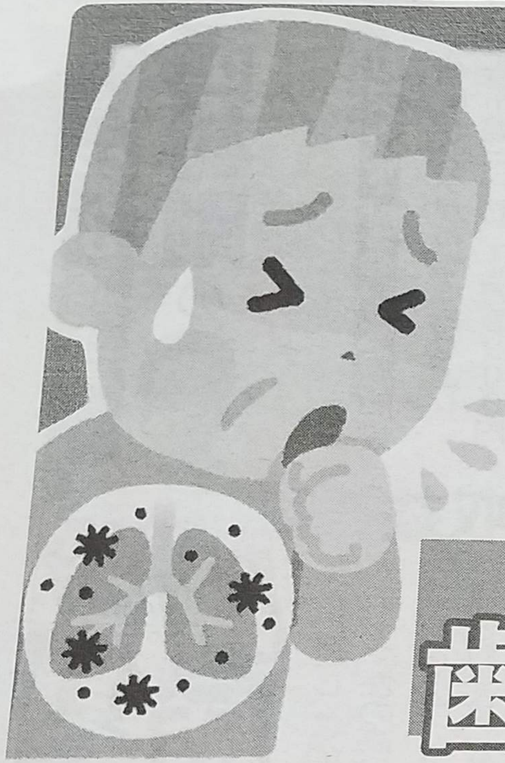
月～金　読んで備える

日本人の死因3位

肺炎を招く「誤嚥」の恐怖 ⑦

胃ろうで栄養補給していた85歳女性

歯科医と連携し嚥下機能復活



東京都目黒区に住む小林佐知子さん(85)は、11年前に脳出血に見舞われた。幸い命は助かったが、その後遺症で昨年4月から嚥下（＝飲み下す）機能が低下。誤嚥による肺炎を繰り返すようになる。

昨年末にも肺炎で入院し、今年1月に退院。この時から在宅診療を担当する「えびす英クリニック」（東京都渋谷区）院長の松尾英男医師＝写真右＝が解説する。

「嚥下機能がかなり低下していたことと、肺炎を繰り返していることから、入院中に胃ろうが造設されていました。退院した時はすべての栄養補給を胃ろうを使った経管で行うようになっており、病院の主治医は退院後も続けるように家族に指示していたようです」

たしかに、この状況で在宅に戻されると、多くは胃ろうによる栄養補給が継続されることになる。つまり、残された人生は口から食べられなくなるのだ。

もちろん、そうすることで誤嚥性肺炎のリスクが下がるという考え方もある。病院側の判断は決して間違ったものとは言えない。しかし、「口から食べる」という行為（ほうてき）した人生はむなしいし、家族として簡単には諦めきれないのも事実だ。

小林さんは脳出血後遺症により受け答えこそ決してクリアではないものの、認知症でもない。同居する2人の娘は介護に熱心で、「何とか口から食べられるようにできないか」と松尾医師に相談した。

「家族が常に一緒にいることで1日4～5回の痰の吸引が可能なこと、理学療法士や言語聴覚士の訪問リハビリの受け入れが可能なことなど条件もそろっていたので、試してみようと考えました」と松尾医師。

在宅における嚥下機能改善に向けた取り組みに力を入れている東京医科歯科大学歯学部の戸原玄准教授＝同左＝に連絡を取り、全身管理は松尾医師、嚥下訓練は戸原准教授＝という2人体制での在宅医療がスタートした。

「初診時から嚥下機能はある程度残存していました。それより横になっている時間が長かったので、体をつかうため上半身を起こして座る時間を長くするように頑張ってもらいました。まずは朝と夜は胃ろうを使って、お昼だけを口から食べるようにしています。柔らかく煮込んだカボチャ、アボカド、O－157の問題が起きる以前はポテトサラダ、肉団子などを食べてもらい、徐々に慣れてきたので嚥下障害がある人向けに調理された牛丼も食べられるようになりました」と語るのは戸原准教授。

取材で訪ねた日、小林さんは柔らかいサイコロステーキを美味しそうに食べていた。

「この調子で行けば、クリスマスのチキンや年越しそばも食べられるかもしれない。去年の暮れは禁食だったことを思うと夢のようです」と喜ぶ長女の希依さんの目に涙が浮かぶ。

年齢とともに嚥下機能は低下する。しかし、トレーニングによって機能を維持し、時には改善することも不可能ではないのだ。（中井広二）